

| | |
|---------------|---|
| Title | 大阪における財界と学問 |
| Author(s) | 黒田, 孝郎 |
| Citation | 大阪大学史紀要. 1 p25-p.32 |
| Issue Date | 1981-05-01 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/12183 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪における財界と学問

黒田孝郎

一

開拓使札幌農学校の開校(明治九年)を北海道大学の開基とするならば、大阪府医学校の開校が大阪大学の開基となつてよいのではなからうか。大阪府医学校は、明治二年二月に、府が蘭医ボードウインを招聘して庶民の疾病治療のための仮病院をつくつたとき、医師の伝習を行なつたのに濫觴する。すなわち明治二年十一月大阪府医学校・病院が成立、四年には、文部省創設によつて、その所轄となり、翌五年には文部省の学制改革によつて廃止となつた。ここで府下の有志、鴻池善右衛門、住友吉左衛門、広岡久右衛門たち多数が贖金して病院の設置を府に請い出た。その結果、明治六年二月、大阪府病院が西本願寺掛所に開院された。病院内に教授局がおかれ、ボードウインに代わつて来日した蘭医エルメレンスその他邦人医師が教育に当たり、この年十二月には学生数三百余人になつたという。

この病院は明治十二年に大阪公立病院、十三年に府立大阪病院と改称するが、このとき教授局が独立して府立大阪医学校となつた。明治

二十三年に大阪医学校に校長として赴任した清野勇は、二十七年に佐多愛彦を病理学担当として招いた。帝国大学(当時東京のみ)以外の地方の医学校では基礎医学が軽視されがちで、病理学の専任をおくことは異例の人事といわれた。

塩見政次は大阪医学校を明治三十三年七月に卒業した。時に二十二歳、その後、次のような経歴をたどる。

三十三年九月 京都帝国大学医科大学生理学教室助手

三十四年十二月 一年志願兵として第四師団第八連隊に入營、期満

ちて除隊

三十六年一月 大阪市高麗橋で開業

三十七年二月 陸軍三等軍医

三十七年 日露戦争に召集、浜田・広島各地に勤務

三十八年 韓国駐劄軍司令部付

八月 二等軍医

戦争が終わると、四十年十二月に合資会社喜多尾化学研究所を設立し、新薬「レスピラチン」その他の創製発売に従事し、経営は大いに

進んだ。彼はさらにわが国における亜鉛精煉事業の確立がなく、海外からの輸入にまつことを慨嘆し、四十二年六月尼ヶ崎に合資会社大阪鋳業試験所を創立し代表社員に選ばれ専ら亜鉛精煉の研究に従事した。自宅での医業と前記二社の事業の傍ら大阪市医師会議員に選ばれ市の医政に参加した。亜鉛研究は成功し、実業家の援助の下に四十四年十月に大阪亜鉛鋳業株式会社を設立し専務取締役就任した。戦乱が欧州に勃発すると工場を大阪市内、岡山県に増設するなど、事業は隆盛に向かい、塩見政次はわが国亜鉛鋳業界の重要人物の一人と目されるに至った。

塩見政次のこのような長年続いた多方面にわたる劇務による過労は、遂に健康を害し大正五年春から病床につき秋には重体となった。当時、大阪医科大学長(大阪医学学校は大阪高等医学学校を経て大正四年大阪医科大学となった)であった恩師佐多愛彦は、十月六日乞われて塩見宅を来訪した。塩見は病床でしたためた手記を、佐多に渡した。それは

一、今日の御来診は、診察其のものが目的ならざることを了せられ
たし。

から始まる二十九条であって、その中に次のような条文がある。

一、茲に先生に卑見を呈して、御尽力を仰ぎたきは、予て素志を申
せしことある研究所の事なりとす。

その事業として

一、東洋に於ける天産物及び農産物の完全なる「インダストリ」の
編成、毎年二回の予定。

一、此原料を基礎としたる利用性状の研究。

一、臨床医学に関する理化学的研究上補助たらしめんとす。

そして財産は調べてみなければわからないが「仮りに百五十万乃至二百万とすれば」、其折半の一部は遺児二人および老人に贈り、「其半額即ち七十五万乃至百万は研究所の資金たるを得べし。」と記している。

これを読んだ佐多は塩見の「健康状態に関しては、これを絶対に秘密に付し、唯その美拳を一日も早く世間に知らしめたい」とて、即座に筆を執って、大要左の意味を文書に認め、高見氏(義堯)を通じて、これを塩見氏に示した所、氏は満足の意を現はし、その発表に同意した。その文から一部を引用しよう。

塩見政次氏は、其資産の一部を抛て、化学研究所を創立し、学問研究の目的を以て、公共に貢献するの希望あり。……財団法人を組織して、理化学研究所を設立し、其管理を、大阪医科大学に委託し、現に同大学に計画中なる理科大学の創立に向って、其理化学教室として之を使用し、以て大阪理科大学の興隆を速成せられんことを希望し、……²⁾

塩見政次は大正五年十月二十二日、三十九年の短生涯を終わった。

文部省は財団法人設立を十月二十一日に認可した。

財団法人 塩見理化学研究所寄附行為

目的

第一条 本財団法人ハ理化学研究所ヲ設立シ以テ理化学及其応用ヲ
研究スルヲ以テ目的トス

本財団法人ハ前項ノ外必要ニ応シ理化学及其応用ニ関シ堪_(堪)応ナル

人物ヲ養成スルモノトス

第二条 本財団法人ハ資産管理ニ属スル事務ノ外ハ相当ノ条件ヲ付シテ前条ニ掲クル事業ノ管理ヲ大阪府立医科大学ニ委託スルコトヲ得此場合ニ於テハ本研究一般ノ研究ノ外大阪医科大学ノ研究教授ノ用ニ供スルコトヲ妨ゲズ。

以下、名称(第三条)、事務所(第四条)、資産(第五・六・七・八条)省略³⁾

かくて塩見理化学研究所は設立され、初代所長には佐多愛彦がなり、所内を理学科と化学科に分け、理学科には物理学部・理論物理学部・数学部、化学科には生物化学部・純正化学部をおいた。理学科長物理学部長には清水武雄、化学科長生物化学部長には古武弥四郎、数学部長には小倉金之助が、まず大正六年五月に就任した。小倉は長岡の推輓によると著作の中で記しているが、佐多は研究所についてはしばしば長岡の意見を聴いていたのである。大正八年には岡谷辰治が理論物理学部に就任するが、それであろうと思う。清水武雄は大正十三年に佐多の後任として所長になるが、翌年長岡半太郎の東京大学退職に伴い後任として転じ、所長には小倉金之助がなった。理学科には昭和三年に長岡の助手であった浅田常三郎、化学科には五年に千谷利三が入った。

明治の初め以来、先進欧米諸国の科学技術の模倣と追従に追われていたわが国も、明治の終りになると、その水準に近づき自立の時期となった。大正二年、第一銀行頭取・東京銀行集会所会長渋沢栄一は高峰讓吉の国際競争上研究所を作らなければならぬという話に共鳴して

運動を起こそうとしていたところ、翌三年第一次世界大戦の勃発となつて化学薬品等の輸入が途絶したところから化学工業の振興の急がつけられた。渋沢はわが国の産業をおこすためには化学のみに止まらず物理学および化学の研究をつくる必要があるといふので大正五年十月、その職のすべてをなげけて理化学研究所設立に専念し大隈首相を動かしたりして政財界から寄付を募る趣意書を出した。しかし「政府からの補助金を受けるのも苦勞が多かったが、民間の寄付も困難を極め」財団法人設立にこぎつけた大正六年三月における民間からの募金は二百八十万円であった。こういった時にあつて一個人の遺贈によつて設立された塩見理化学研究所は「当時注目をひいた」⁴⁾

塩見理化学研究所は設立後、経済界の急激な変動に遭遇したことは不幸であつた。その波及のためだったのだろうか、研究所の建物が完成したのは大正十四年の暮であつた。佐多学長は大阪医科大学および病院の新規改築事業がほぼ完成をみた大正十二年に、塩見理化学研究所を基礎として理科大学をつくり医理綜合大学とするといふ多年の願望を実現に向け、ゆくゆくは帝国大学にしようといふ計画をもつた。

大正十二年の八月、この考えを塩見理化学研究所創立以来意見を聴いていた長岡半太郎に話したところ彼は賛成し、さらに文部次官松浦鎮次郎にも話した。長岡もまた松浦次官に話し実現を促した。その矢先の大正十二年九月一日、関東地方は大震災に見舞われ帝都一帯は大破壊を蒙つた。その惨害は以後十年間、政府予算に大学創設の事業を組むことの困難を思わせるに十分であつた。佐多愛彦は同年末引退の志を発表し、大正十三年五月大病院落成式を終えると在職三十年を期

として大阪医科大学長の職を去った。

それから七年の歳月が過ぎ、かつての大阪府内務部長柴田善三郎は大阪府知事として帰ってきた。彼は熱心に大阪綜合大学の案を練り、昭和五年七月、塩見理化学研究所の理事である佐多愛彦に腹案を告げ財団法人塩見理化学研究所に協力を求めてきた。佐多理事はかつて自分が計画し実現をみなかった医理科系中心の綜合大学の建設の時機であると全面的に賛同し、左記のような協議案を財団の協議員会に提出しその賛成をえた。

協議案

柴田大阪府知事は大阪に理科大学を新設し、大阪医科大学を移管して大阪帝国大学を創立せられんことを立案し、主務省と交渉中にして其実現に向て理科大学の新設に必要な経費を大阪府費並に塩見理化学研究所資金の一部の寄附に俟たんとす。而して右理科大学設置の上は吾塩見研究所は当然其の管理に移し、本研究を大学教室の一部に充て、其職員は大低大学の職員となり、研究費も亦多く大学の経費を以て支弁せらるゝこととなるべきを以て、財団法人塩見研究所は其資金の内金四十万円を限度として大阪府知事の請求により右理科大学創立費の中に寄附して新大学の実現に資して以て本財団寄附行為本来の目的を貫徹せんとす。(以下「但し書き」省略)

また備考があつて、財団の所有する資金は維持資金七十五万円、積立金約十五万円で、研究所一カ年経費は四五万円と記してある。

柴田知事は再三文部省と交渉を重ねて大学案を練り、浜口雄幸内閣の田中隆三文部大臣および井上準之助大蔵大臣を始め政府要路に奔走

し大阪帝国大学設置案は終に追加予算案として昭和六年春の議會に提案され、四月二十三日大阪帝国大学官制が公布となつた。この実現のために、大阪の政財実業など各界あげての尽力は他に類をみないほど熱烈なものであつたことは特記しなければならぬ。かくて大阪帝国大学の設立となり、初代の総長には長岡半太郎がなつた。

なお、大阪工業大学は昭和四年四月一日に官立工業大学官制の公布によつて東京工業大学と共に設置されていた。東京広島両文理科大学、東京商科大学、神戸商業大学設置と同じ時である。

二

佐多愛彦と同じ薩摩出身で明治四十五年から七年間大阪府知事の任にあつた大久保利武は、『佐多愛彦先生伝』(昭和十五年刊)が古稀を祝して出版されるに当たつて序文をよせ、その中で次のようにいう。

大阪の地は元來何人も學術とは縁遠い思をなすものであるが、併し大阪の歴史を回顧して、大に興味を惹くものがある。徳川時代の中世、鴻池、住友、其外財界の有志は、幕府の特許を得、大阪学園所懐徳堂を創設し、中井竹山始め当年有名の学者を聘し、自から師事して學問を修め、また広く通俗講演会を開催し、大に所謂商業道徳を涵養扶植したが、維新の際廢絶されたので、財界の有力者は甚だこれを遺憾なりとし、余の大阪在任の折に、懐徳堂の再興を見るに至り、學問の伝統を恢復して、今日大に学会に異彩を放ちて居る。大阪の財界人は常識に富み、実行に長じ、大胆にして細心、実業家

として偉大の素質を備へると云はれて居るが、将来我国商工業大部
市として、その大使命を發揮するに当りて、独り人文科学のみなら
ず、盛んに自然科学の発達に、その力を要すべきは申すまでもない」
この文章が書かれた二百年ほど以前、懷徳堂の儒学者中井竹山・履
軒をたよつて豊後杵築藩を脱藩して大坂に出てきた天文学者がいた。
彼は藩の医官で綾部剛立といい幼時から天文が好きで、二十四歳（一
七五七）のときの観測はすでに専門家をしのぐものがあつたと評価さ
れている。天文暦学の研究をしたいといふので何度も藩に辞任を申出
たが許されなかつたので、脱藩して出てきたのであつた（一七七一頃）。
彼は藩を憚かつて姓を麻田と改め、旧知の中井兄弟の世話で本町四丁
目に家を借り医を開業して生活を営み、かたわら天文暦学の観測研究
をし塾・先事館を開いて教授した。彼の実証的・合理的な学風は評判
が高く、そこからは高橋作左衛門至時・間重富・山片蟠桃・足立左内
たち英才が集まつた。高橋は下級武士、間は長堀川富田屋橋北詰にあ
る代々十一屋五郎兵衛を名のる質屋の主人、山片は北浜五丁目にある
代々升屋平右衛門を名のる両替屋の番頭であつた。間重富は器械に関
心をもち工夫改良の才があつて職人を育成して各種の天文観測器械を
製作させたほか、その財力をもつて麻田流天文学興隆に貢献すること
少なくなかつたといわれる。山片蟠桃の影響を幼少の頃からうけた主
人山片重芳は蘭学に鋭い関心をもち書籍や舶来器械に興味をもち、財
力のあるところから、それらを購入し同学の士に便宜をはかり麻田一
門はいうに及ばず江戸の大槻玄沢にまで及んだといわれている。

古来、農業が主たる産業であつたわが国では、暦は農作業の時期の

決定にとつて重要なものであつた。渤海から唐の宣命暦（八二二年制定
がもたらされ、八六一年から用いられたが、永年にわたつて漫然と形
式的に適用してきたため、十七世紀中頃になると暦に記載されていな
い時に日月食が起こつたり、朔に三日月が現われるなど暦が天体現象
と合致しなくなつてしばしば問題になつた。そこで一部の学者は元の
世祖（クビライ汗）の時につくられた授時暦や明の大統暦（一三八四）を研
究したが、暦は朝廷の大権に属することで改暦はなかなか進まなかつ
た。ついに一六八四年に宣明暦を廃して大統暦を行なうことになつた
が、実に八二三年ぶりの改暦であつた。しかし半年余りにして授時暦
と大統暦を勘案してつくられた貞享暦にかわつた。一七一六年に將軍
になつた吉宗は天文暦学に関心をもち改暦を志し、和算家関孝和の高
弟建部賢弘を顧問とした。建部の弟子中根元圭から、イエズス会宣教
師によつて漢訳されている天文暦学の書が禁書になつてを知
つた吉宗は、寛永の禁書令（一六三〇）の一部を解いた（一七二〇）。依然
として天体現象との間のずれのある貞享暦にかわつて、宝暦甲戌元暦
が制定された（一七五四）。貞享暦以後七十年、改暦を志した吉宗の没
後四年のことである。この新暦頒行後四十余年たった一七九五年の元
旦に日蝕が起こつたが暦にその記載はない。そこでまた改暦の議が起
こり、ついに大坂から麻田剛立が起用されることになつた。剛立は老
令多病を理由に固辞し、門下の高橋至時・間重富を推挙した。二人は
先任の三人に加わつて天文方となり、後さらに同門の足立左内が改暦
御用手付となつた。一七九七年、寛政暦の頒布となるが高橋至時の力
によるところが大きいといわれている。至時の門からは伊能忠敬が出

で、至時の没後は嗣子が高橋作左衛門景保を名のって天文方となった。

麻田剛立はイエズス会の宣教師の漢訳になる『曆象考成・上下篇』(二七二三刊)を講じていたが、ケプラーの橢円軌道上の不等速運動を説く『曆象考成・後篇』(二七四二刊)を入手すると、それを講ずるようになる。

剛立はケプラーの第三法則(惑星周期の二乗は太陽からの平均距離の三乗に比例する)を実験証するに至ったというから、当代わが国における天文の第一人者であったといわれる。麻田剛立の高弟間重富は学が進むにつれて、漢訳からの西洋天文学では満足できなくなり直接西洋の天文暦学の書に当たろうという意欲をもつに至った。そのすこし前に杉田玄白らの『解体新書』が刊行(二七七四)され、その影響は京坂に及び人体解剖が行なわれるようになり、元来医者であった剛立は数回関与し懷徳堂の儒学者中井履軒も参観する機会をもった。そのような情勢にあって何回も解剖を行なっている医師小石元俊は剛立と同様、西洋の医学書に直接当たろうという意欲をもつに至った。

たまたま、オランダ伝来のエレキテル(起電機)を操る北堀江(西区)で傘屋の紋書きをしている二十一歳の青年の非凡な奇才が、巷間で評判になった。町人天文暦学者間重富と旧知の町医者小石元俊の間に、この青年に自分たちに代わってオランダ語をやってもらおうという案が浮かんた。そこで二人は、この青年に学資、残された留守家族に生活費を給して、彼を江戸の大槻玄沢のところに留学させた。杉田玄白は『蘭学事始』(二八一五)のなかで記しているのは、この青年のことである。

大坂に橋本宗吉という男あり、傘屋の紋を画く事を業として老親を養い世を営めりと。不学なれども生来奇才あるものゆえ、土地の豪商ども見立て、力を加え、江戸へ下して玄沢が門に入れたり。僅かの逗留の間出精し、その大体を学び、帰坂の後も自ら勉めて其業大いに進み、後は医師となつてますます此業を唱え、従学の人も多く、漸く訳書をもなし、五畿・七道・山陽・南海諸道の人を誘導し、今におけるいよいよ盛なりと聞けり。

医家に生まれた中天游は家にあつた『解体新書』を見てその合理的なのに強く打たれたが、京都にこの学に通ずる人を知らなかつた。そこで、この本の出た江戸に出て大槻玄沢の門に学ぶこと一年にして京都へ帰つた。天游は玄沢の高弟海上随鷗の門で学んだ後、大坂に出て京橋堀千秋橋北詰に居をかまへ医を行ないながら思々齋塾を開いて理学系統の学を講じ、橋本宗吉の塾に出入りしてオランダ語の研修を続けた。緒方洪庵が十七歳にして入門したのは、この中天游の塾であつた。彼は学ぶこと四年、師天游のすすめに従つて江戸に出て坪井信道の蘭学塾で四年間学んで大坂に帰つて適々齋塾を開く。この塾から多くの人材を輩出したことは、よく知られているところである。

三

鴻池・住友たち豪商によつてつくられた懷徳堂、間・山片といった老舗の財力の援助のあつた麻田流天文暦学、さらに間・小石の出資による橋本宗吉の江戸留学、近くは塩見政次による理化学研究所、そし

て理学部創設など、大坂財界の学問の興隆につくした功績はなみなみならぬものがある。こういった土地に育った学風について緒方の塾で塾長を勤めた福沢諭吉は『福翁自伝』（二八九九）の「緒方の塾風」として次のように記している。

江戸と大坂とおのずから事情が違っている。江戸の方では開国の初とはいいながら、幕府を始め諸藩大名の屋敷というものがあって、西洋の新技術を求むることが広く且つ急である。従って、いささかでも洋書を解すことの出来る者を雇うとか、あるいは翻訳をさせればその返礼に金を与えるとかいうようなことで、書生輩がおのずから生計の道に近い。（中略）それに引き替えて、大坂はまるで町人の世界で、何も武家というものはない。……それゆえ緒方の書生が幾年勉強しても何ほどエライ学者になっても、頓と実際の仕事に縁がない。すなわち衣食に縁がない。……粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、智力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただ六かしければ面白い、苦中有楽、苦即楽という境遇であった……。

この伝統は古く儒学についてもいえるのではないだろうか。幕府に庇護され、ついには学問の面から逆に幕府を庇護することになった官学林家の朱子学に対して、上方では伊藤仁齋たち古学派が勃興し、町人に儒学を講ずる懷徳堂が商人によって建てられる。そこは幕府権力の支配するところと違って、商人の活動するところで合理性が生ずるようになるのではなからうか。

関東の財界の家に出生した正田建次郎は昭和八年に新設の大坂帝国

大学理学部に教授として着任し、代数学の講義を開始した。三十年をこえる大阪での生活を省みて次のようにいう。

「もうかりまっか」という言葉で東京人から皮肉られる経済観も、実は合理主義の結果であるというふうに理解するようになった。このような私の見方の変化は、単に在阪年数が永かったからとばかりはいえない。大阪文化とでも言う本質的なものが作用した結果だと思ふ。

大阪大学は戦後に、基礎工学部（一九六一年創設）、人間科学部（一九七二創設）の二つの前例のない新しい学部を創設している。学長時代に設立に尽力した正田建次郎は、次のように書いている。

科学技術の根本的な開発は科学と技術の融合の上になつてできるのだと思われぬのに、……その所がうまくいっていないように思われた。それを打ち破るには、まず理学と工学を融合した一つの学部をつくるべきだというのが、阪大の基礎工学部という発想になつたといつてもよいだろう。理学、工学という枠にとられない人間の存在も、文化の向上に必要なという考えとともに、幾分かは、後進大学として東大の真似ばかりしているのも能がない、という考もあつたかも知れない（阪大基礎工学部の設置「一九七二」）。

新しいもの、前例のないものに対する文部省・大蔵省の拒否反応は伝統的に根強いものがある。当時の「文部大臣松田竹千代の決断と、関経連（関西経済連合会）を中心とする関西財界よりの協力と確約が大蔵省を動かしただろう」と正田建次郎は回想している。さらに「大阪財界と大阪大学」と題する文では次のようにのべる。

私が大阪大学に、日本で初めての基礎工学部という構想を打ち出したとき、関経連の会長の太田垣土郎さんを会長とする大阪大学基礎工学部協力を作り、実務的には工藤友恵さんが中心になり、巨額の寄附金を集めて下さった。基本的な技術開発を目指すもので、いわば理学と工学をその意味で融合させたような学部である。従って、この学部はその性格上、身近な技術者を養成するより、むしろ遠い将来の革命的な技術開発を目指すものである。大阪大学の創設に当たり、医科大学が医学部になった他に、自然科学の面の基礎となる理学部が新たに創設されたことを思い合せ、大阪財界が、目先のことに捉われず、大学が自主的に決定する方針に常に深い理解を持って、その発展に協力してこられた事実に対して心から感謝したい。

そして、次の文章で結ぶ。

大阪財界と大阪大学に関する限り、私は一度も財界からの圧力らしきものを感じたことはなかった。有難いことだと思ふと同時に、それが当然のことだという認識を持っておられる大阪財界の方々の良識に、深い敬意を表したいと思う。この関係が、今後も永く続くことを信じ、また願っている次第である。¹⁰⁾

かつて大久保利武元知事は、大阪財界は古くから学問をおしみなく援助してきたとのべた。そこで育成された学風は権力に縁のないということであつたと福沢諭吉はのべた。しからば、どうして財界は学問を援助したのであろうか。正田建次郎先生が指摘された大阪財界のもつ合理主義が、学問に連らなるところがあつたのではないかとわた

くしは考へる。

〔註〕

- 1 『大阪大学医学伝習百年史年表』による。
 - 2 佐多愛彦先生伝 高梨光司 一九四〇 以下本節は同書に負うところが多い。
 - 3 『財団法人塩見理化学研究書要覧』一九三二。
 - 4 『日本科学技術史大系・第三卷』第三章 理工学研究機関の整備、日本科学史学会編 第一法規 一九六七。
 - 5 2に同じ。
 - 6 『大阪帝国大学創立史』西尾幾治編 一九三五、にくわしい。
 - 7 中野操 『大坂蘭学史話』思文閣 一九七九 本節は同書に負うところが多い。
 - 8 大槻如電原著 佐藤栄七増訂 『日本洋学編年史』錦正社 一九六五 改暦に関する事項は本書に負うところが多い。
 - 9 藤内清 『江戸時代における西洋天文学の影響』ただし『大坂蘭学史話』から引用させていただいた。
 - 10 『大阪財界と大阪大学』（関経連創立三十周年記念特集 一九七六 『正田建次郎先生「エッセイ」と思ひ出』同編纂委員会、新興出版啓林館一九七八 所載）。
- 付記
特に『佐多愛彦先生伝』『大坂蘭学史話』『洋学編年史』の著者には、深甚なる謝意を表させていただく。
なお、大阪大学は人間科学部という新しい前例のない学部を創設した。このことについて記すべきであろう。わたたくしは北海道大学に在職中、旧総合大学の教育学部部長会議の席で、人間科学部の創設になみなみならぬ尽力をなされた澤鴻久敬文学部部長（大阪大学には教育学部がなく文学部部長が該当学部長として出席された）から、数回断片的にお話をうかがった。しかしながら現在、稿をおこすに足る資料を持つに至っていないので、割愛させていただくことにした。お許しを乞う次第である。

（くろだ たかお 専修大学商学部）